

り当てる。これにより外部・学内のいずれからのトラフィックもファイアウォールを通過することになり、詳細に制御することが可能になる。

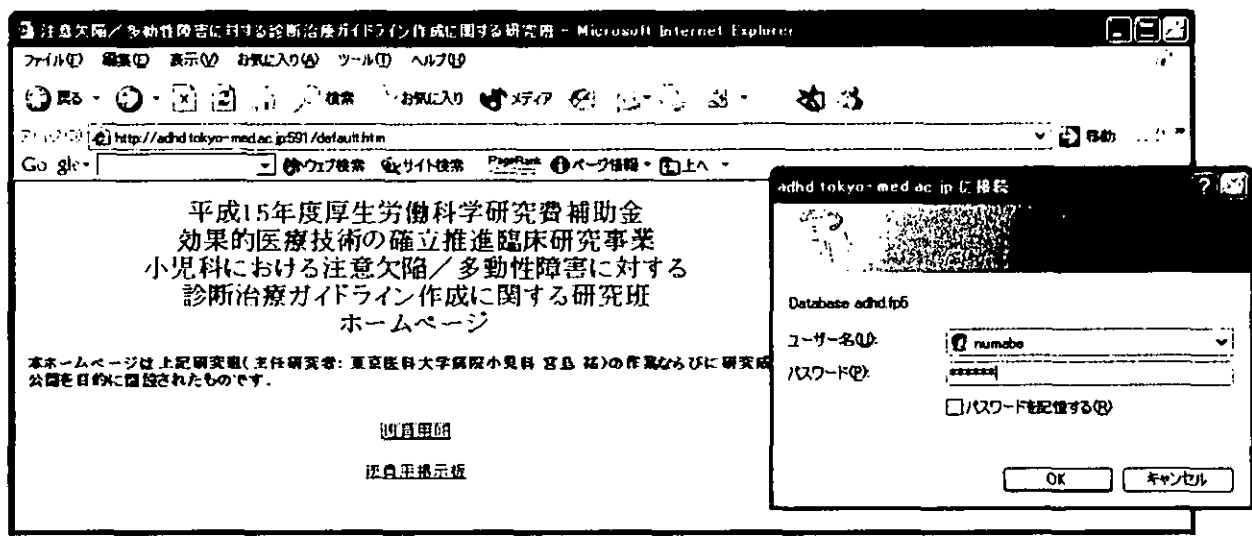


図4: 現在のホームページ. 研究班のメンバー向けのページのみからなる.



図5: サーバ機器室(左)と種々のサーバマシン群(右)

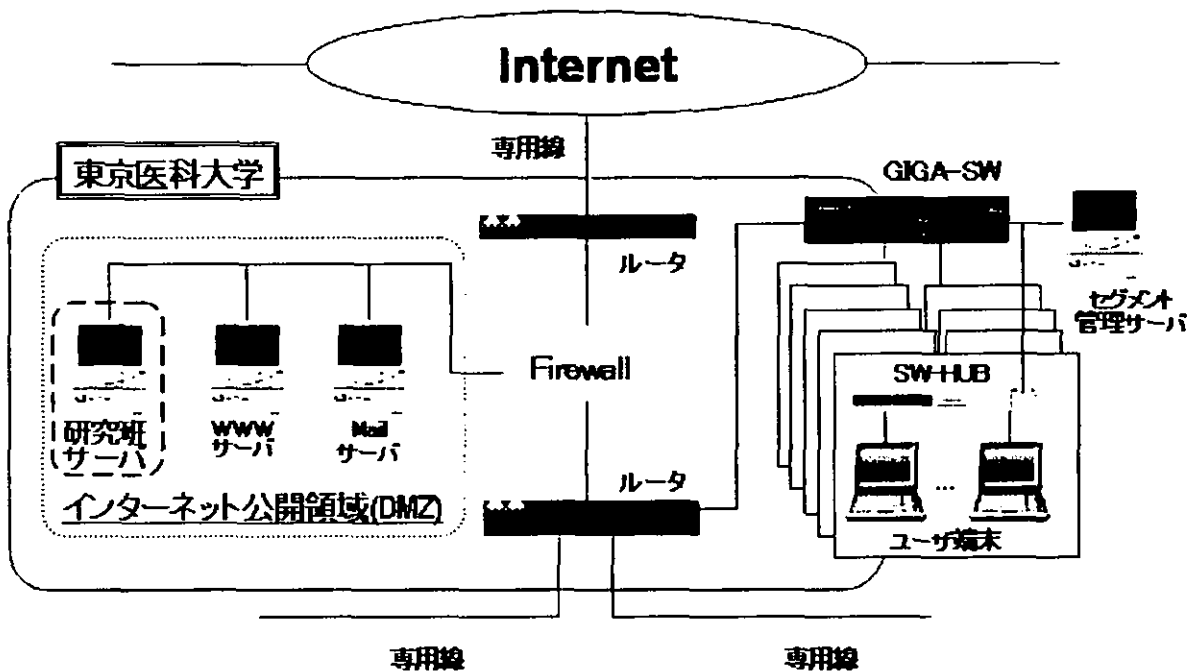


図6: 東京医科大学ネットワーク構成図. 公開サーバは DMZ 内に設置されている.

データベースには極力個人情報の記載は避けていただく予定であるが、個人情報に準ずる情報も記載されることなどから、高度のセキュリティを有する必要がある。この目的で、データベースへのアクセスには、ID・パスワードによる個人認証を行うことを原則とした。パスワードは定期的に変更して安全性を確保する予定であるほか、試用期間を経て、利用者のアクセスしてくるサーバのアドレス情報を収集し、特定のサーバからのアクセスのみを許可する設定変更を行い、更なるセキュリティの確保を行う予定である。

停電時にも復旧までの間、システムが保持されるよう、ノートブック型のコンピュータを採用した。今回は OS X をオペレーティング・システムに採用している Macintosh に種々のデータ・バックアップ機器を接続し、データ保持の安全性を確保した。

6. データベースの設計

円滑なデータベースの運用を行うためには、データベースの初期設計が重要となる。広く班員の意見を取り入れ、将来的な統計的分析にも耐えうる入力項目を設定することが重要である。FileMaker では、データベースの設計変更が比較的簡便に行えるが、データベースのレイアウトなどは、設計変更に合わせて変える必要性があり、初期の段階での十分な検討が肝要である。

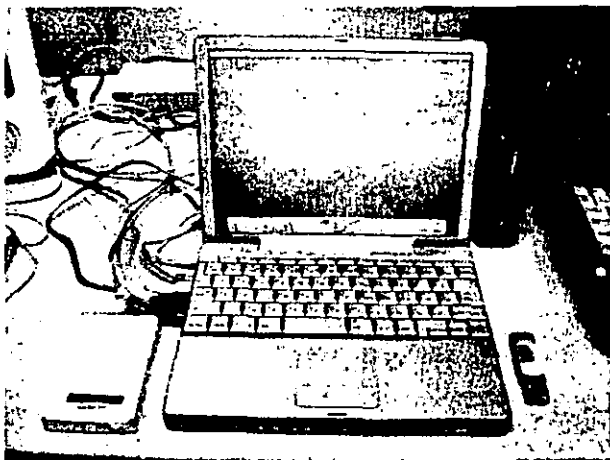


図7: 研究班用サーバ機器

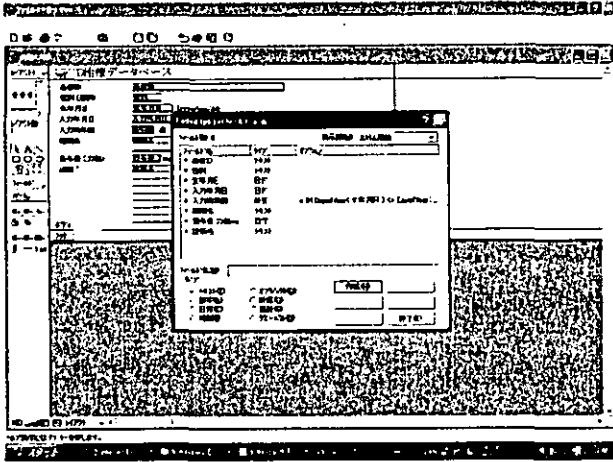


図8: データベース設計, レイアウトの例

また、将来的な統計学的処理に関しては、FileMaker 単体では対応しきれない可能性のある点は否めない。本ソフトウェアには、Microsoft Excel などのファイル型式との相互変換機能があるため、これを用いて最終的に処理を行うことが可能である。

7. 掲示板の設置

通常、研究班の打ち合わせには、研究班メンバー全員に宛てての同胞メール機能を用いることが多い。しかし、研究班専用のアドレスを取得してこれを用いている場合でも、メールの数が増えると、検討すべき案件の内容が交錯したり、どのメールにどの案件が含まれていたかが分からなくなるなどの欠点があった。理想的には、各メールの表題の作成に留意して、検討案件名をその中に含めれば良いのであるが、ひとつのメールに複数の案件が含まれたりして、必ずしも統一出来ないのが難点である。

これらの問題を解決するためのひとつの方法が掲示板の利用である。掲示板を「通常連絡」、「議事録」、「～に関する検討」などと分けて設置すれば、更に討議などが行い易くなると思われる。

掲示板の利用は、現在のところ班員のみに限られるため、利用に際しては、ID・パスワードによる個人認証が必要となる。しかし、将来的に広く意見を求めたい内容などがある場合には、一部の掲示板では個人認証を行わない方式として一般のネット利用者にもある程度自由に書き込みを行えるようにすることも出来る。ただし、この場合には、一定時間毎に掲示板の書き込み内容をチェックする管理者を立て、悪意の書き込み、悪戯、破壊行為などに十

分留意する必要がある。

掲示板は原則として Perl 言語を用いて CGI 形式で作成する。利用目的に合わせて、いくつかの型式の掲示板を用意し、実際に研究班のメンバーに利用していただき、どの型式が使用しやすいかについても今後、評価を行う予定である。インターネット上の掲示板の多くが、不特定多数の人間が書き込み可能な形を取っているために、ともすれば情報漏洩にもつながりかねないとの誤解も少なくない。しかし、個人認証方式の掲示板も多数存在し、その存在自体が一般に知られていないこと自体が、秘匿性の高さを示す証左と考えることも出来る。今回採用する掲示板も研究班のメンバーの利用部分については、上述の通り、個人認証により高いセキュリティを確保する設計となっている。

C. 結果

小児科における注意欠陥／多動性障害に対する診断治療ガイドライン作成に関する研究班のホームページを作成した(図4)。アドレス(URL)は、<http://adhd.tokyo.med.ac.jp> である。

ホームページには、現在のところは研究班名と、データベースへのリンクならびに、研究班メンバーだけが利用出来る掲示板へのリンクが掲載されているだけで、現在のところは一般への公開を考慮したページ構成にはなっていない。

D. 考察

1. ホームページの作成の意義

インターネットによる情報技術(IT)により、様々な分野において、コミュニケーションの飛躍的向上がはかられている。

医療の分野でも既に、IT による遠隔医療診断補助の実現や、さまざまな疾患の情報に関するホームページの立ち上げなどが行われている。インターネットは種々様々な情報を提供してくれる有力な情報システムであるが、その反面、玉石混交のデータが混在し、必ずしも科学的根拠に基く情報のみが掲載されているとは限らない。また時には悪意を持った情報を以て利用者に混乱をもたらす場合も少なくない。

こうした中において、公的な役割をもった組織が EBM に基く正確なデータを提供することは重要な意味を持つ。本研究班の研究成果も、十分な知識と経験を有する研究班のメンバーによる知識の集積であり、公共の利益に資する

内容でもあり、広く公開する責務がある。その意味で、研究成果の発表をホームページ上で行うことには重要な意義がある。

2. 掲示板システムの意義

また、研究班の形で研究者を集め研究を進めるにあたり、通常は、班会議などの形で集合討論を行うことが多い。しかし、遠隔地に在住するメンバーを一定時間一定箇所に集めての議論には、限界があり、場合によっては不十分な討論の上で結論を出さざるを得ないことも想定される。このような事態を避けるためには、個々のメンバーの研究状況や意見などを出来る限りリアルタイムで他のメンバーが把握し、複数の項目について並行して討議が進められる体制のあることが望ましい。

距離の問題はリアルタイムの画像システムを用いたネット会議の利用などである程度解決できる問題であるが、会議時間にとらわれることなく十分な検討を行いたい事項などは、むしろリアルタイムではない会議システムにより行うことが望ましいと考えられる。すなわち、発言者が検討に必要な資料をメンバー全員に提示し、自身の意見を文章で示したものを他のメンバーが十分な時間をかけて検討し、意見を述べ、また必要があれば追加資料を提出するというものである。これは、インターネット上では、掲示板システムなどを用いて実現することが可能である。この場合、掲示板への意見の書き込みなどは、自分の都合の良い時間に行うことが出来るため、会議時間に拘束されることがないのが最も大きな利点である。今回は、このシステムの導入を試みている。実際の運用面などで予期せぬ問題も発生する可能性があるため、こまめに手直しをして、使いやすいシステムへの改変を重ねる予定である。

なお、この掲示板を用いた討議システムでは、通常のメーリングリストなどとは異なり、発言した内容などに誤りのある場合には、発言者がその内容を消去したり、訂正することが出来る利点がある。また、議長役に掲示板の書き込み内容を整理する権限を持たせることにより、討議内容に関係ない部分を編集できるようになる。また、当然のことながら、討議への参加は研究班のメンバーのみに限り、掲示板の内容が第三者に漏洩しないよう、十分な個人認証とセキュリティシステムに守られるよう設計してある。

3. オンライン・データベース作成の意義

本研究班は診断と治療の両者のガイドラインの作成を目的としている。前者は診断基準の作成、後者は治験データに基いた確かな治療の実現を目標としている。それぞれのデータは、多くの方に診断システムや治験薬を使用していた上でデータ蓄積を行い、それを分析した上ではじめて有用性の有無などを確認することが出来るものである。従って、データは逐次、蓄積して行く必要がある、またその進捗状況を研究班のメンバーがリアルタイムに知ることが出来ることが望ましい。

この目的で今回はオンラインでの操作の可能なデータベースシステムを導入した。データの収集に際しては、患者データを収載する関係で、高度の個人情報の保護が必要なシステムであり、データベースへのアクセス権限を細かく設定し、データベース内容の漏洩を防ぐとともに、誤操作などによるデータベース内容の破壊なども起こらないよう留意している。

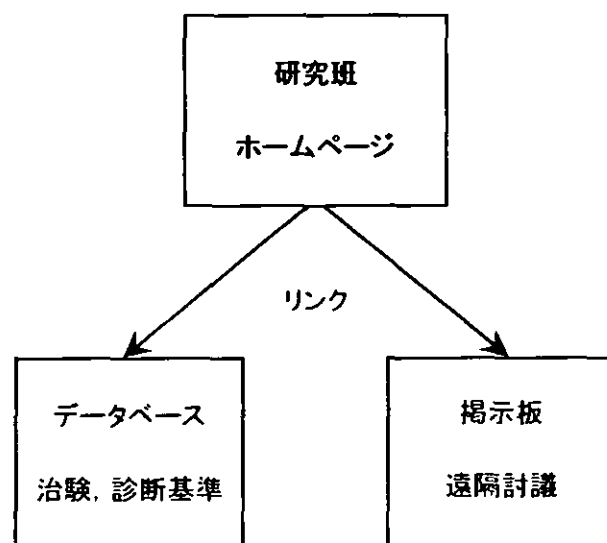


図9: 現在のホームページ構成

現在はまだデータベースは設計段階であるが、今後はデータベースに収載されるデータ内容の保護やセキュリティの保持に関しても更に十分な検討を進めて行く予定である。

今回、構築した研究班用の情報システムは、必ずしもデータベースシステムを利用する研究グループに限らず、掲示板による討論システムのみを用いて情報交換を行うなど、応用範囲

は広いものと考えられる。しかし、その一方で問題となるのが、掲示板システムの運用方法であろう。少人数が個人認証を行って利用する掲示板であれば問題は少ないものと思われるが、大人数が利用する場合や、グループメンバー以外にも掲示板を公開する場合などには、相応のルールを設けておかなければ大きな混乱に陥る可能性がある。また、たとえ少人数であっても、個人の意見の対立から議論が目的外の方向に進む場合もあり、このような混乱を収めるための運用管理に当たる責任者を設置することが望ましい。

本情報システムの運用成果に関しては、次年度の報告となる予定であるが、その応用の可能性も含めて詳しく報告したい。また、データベースも現在は設計段階であり、どのような形のデータベース型式が操作し易いか、セキュリティの確保はどのようにして行うことが望ましいかなども含めて、今後も議論した上で、構築を進めてゆく予定である。

E. 結語

主として小児科における注意欠陥／多動性障害に対する診断治療ガイドライン作成に関する研究班班員の使用を前提とした情報交換用のサーバの仕様ならびにホームページ、オンライン・データベース、掲示板などからなる班研究用の情報システムの構築について述べた。

ネット技術の進歩やネット環境の変化により、ネット構成や機器構成はセキュリティの確保を最優先としてシステムを常に柔軟に変化させる必要がある。今回は、現時点でのサーバ環境ならびにサーバ機器に対応するセキュリティ対策を施し、個人認証方式を採用して個人情報保護をはかるシステムとしている。

本年度はシステムの設計ならびに構築を主として行っており、まだ十分な稼働実績はない。実際に研究班のメンバーにより、サーバへのデータ蓄積ならびにネット・システムを利用した討議などを行いつつ問題点を整理し、今後のシステムの改良に結び付けて行く方針である。また、将来的には、班研究の成果を患者様と双方向性を持って共有出来る体制が作られることが望まれるため、そのシステム作りも目指して行きたい。

F. 文献

1. 沼部博直, 立花真紀. インターネットを利用した遺伝医学情報公開における問題点. 臨床

遺伝研究 22(1): 37~50, 2001

2. 沼部博直, 星加明徳. 遺伝医学ホームページに寄せられた電子メールの内容の検討. 小児保健研究 61(3): 496~502, 2002

3. Hironao NUMABE, Tatsumi OHHARA, Hajime NAWA, Daisuke HASEGAWA, Maki TACHIBANA, Tetsuya SAITOH, Hisashi KAWASHIMA, Akinori HOSHIKA. Developing an Online Dismorphology Database System (ODDS) for diagnoses of congenital anomalies. 東京医科大学雑誌 60(4): 285~290, 2002

4. 福嶋義光, 村瀬澄夫, 鈴森 薫, 沼部博直, 吉河康二, 長谷川知子, 中堀 豊. 遺伝医療資源とそのネットワーク化に関する研究. 平成 11 年度厚生科学研究費補助金 (子ども家庭総合研究事業) 遺伝医療システムの構築と運用に関する研究 分担研究報告書 920~923, 2000

5. 藤田 潤, 小森 優, 小杉真司, 清水敬子, 沼部博直, 吉川康二, 吉田邦広. 遺伝カウンセリングに必要な情報システムに関する研究. 平成 12 年度厚生科学研究費補助金 (子ども家庭総合研究事業) 遺伝カウンセリング体制の構築に関する研究 分担研究報告書 702~705, 2001

6. 藤田 潤, 小森 優, 小杉真司, 清水敬子, 沼部博直, 吉川康二, 吉田邦広. 遺伝カウンセリングに必要な情報システムに関する研究. 平成 13 年度厚生科学研究費補助金 (子ども家庭総合研究事業) 遺伝カウンセリング体制の構築に関する研究 分担研究報告書 589~594, 2002

7. 藤田 潤, 板井孝一郎, 伊藤克彦, 蔵田伸雄, 小杉真司, 小森 優, 清水敬子, 沼部博直, 吉川康二, 吉田邦広. 遺伝子医療実施のための情報整備に関する研究. 平成 14 年度厚生科学研究費補助金 (子ども家庭総合研究事業) 遺伝子医療の基盤整備に関する研究 分担研究報告書 576-580, 2003

8. 奥山虎之, 緒方 勤, 掛江直子, 川目 裕, 久保田健夫, 小須賀基道, 沼部博直. 遺伝子医療センターの基盤整備に関する研究. 平成 14 年度厚生科学研究費補助金 (子ども家庭総合研究事業) 遺伝子医療の基盤整備に関する研究 分担研究報告書 603-605, 2003

9. 奥山虎之, 羽田 明, 斎藤伸治, 蒔田芳男, 山田正夫, 沼部博直. 先天異常の遺伝子診断システムの確立に関する研究. 平成 15 年度成育

医療研究委託費研究事業 先天異常の遺伝子診断システムの確立に関する研究分担研究報告書 in press

III. 研究班構成員名簿

厚生労働科学研究費補助金（効果的医療技術の確立推進臨床研究事業）

小児科における注意欠陥／多動性障害に対する
診断治療ガイドライン作成に関する研究
（H15—小児—003）

研究構成員名簿

【主任研究者】

氏名	住所	所属・役職	TEL・FAX	e-mail
宮島 祐	〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-7-1	東京医科大学 小児科講師	03-3342-6111 03-3344-0643	jsppn@tokyo-med.ac.jp

【分担研究者】（順不同）

氏名	住所	所属・役職	TEL	e-mail
田中英高	〒569-8686 大阪府高槻市大学町 2-7	大阪医科大学 小児科助教授	0726-83-1221	hidetaka@poh.osaka-med.ac.jp
林 北見	〒162-8666 東京都新宿区河田町 8-1	東京女子医科大学 小児科講師	03-3353-8111	kitami-h@h4.dion.ne.jp
宮本信也	〒305-8572 つくば市天王台 1-1-1	筑波大学 心身障害学系教授	0298-53-6716	smiyamot@human.tsukuba.ac.jp
小枝達也	〒680-8551 鳥取市湖山町南 4-101	鳥取大学 教育地域科学部教授	0857-31-5155	koeda@fed.tottori-u.ac.jp
山下裕史朗	〒830-0011 久留米市旭町 67	久留米大学医学部 小児科講師	0942-35-3311	yushiro@med.kurume-u.ac.jp
加我牧子	〒272-8516 市川市国府台 1-7-3	国立精神神経センター 精神保健研究所 知的障害部部長	047-372-0141	kaga@ncnp-k.go.jp
齊藤万比古	〒272-8516 市川市国府台 1-7-3	国立精神神経センター 精神保健研究所 児童思春期精神保健部 部長	047-372-0141	mahikos@spn6.speednet.ne.jp

【研究協力者】(順不同)

星加 明德	東京医科大学小児科教授
沼部 博直	東京医科大学医療情報学講座講師
山中奈緒子	東京医科大学小児科臨床研究医
大澤真木子	東京女子医科大学小児科教授
小国 弘量	東京女子医科大学小児科助教授
猪子 香代	東京女子医科大学小児科非常勤講師
石井かやの	東京女子医科大学小児科助手
岩崎 信明	筑波大学小児科講師
永光信一郎	久留米大学医学部小児科助手
今泉 敏	広島県立保健福祉大学教授
安立多恵子	鳥取大学医学研究科生命科学専攻
葛西 和美	鳥取大学教育学研究科障害児教育専攻
稲垣 真澄	国立精神神経センター精神保健研究所知的障害部
白根 聖子	国立精神神経センター精神保健研究所知的障害部
小穴 信吾	国立精神神経センター精神保健研究所知的障害部
山口奈緒子	国立精神神経センター精神保健研究所知的障害部
渡部 京太	国立精神神経センター国府台病院児童精神科
藤井 猛	国立精神神経センター国府台病院児童精神科
小平 雅基	国立精神神経センター国府台病院児童精神科
宇佐美政英	国立精神神経センター国府台病院児童精神科
秋山三左子	国立精神神経センター国府台病院児童精神科
入砂 文月	国立精神神経センター国府台病院児童精神科
佐藤 至子	国立精神神経センター国府台病院児童精神科

IV. 班會議事錄

【第1回班会議議事録】

平成 15 年度厚生労働科学研究費補助金
効果的医療技術の確立推進臨床研究事業
小児科における注意欠陥・多動障害に対する診断治療ガイドライン作成に関する研究
(H15-小児-003)

第1回班会議

期日：平成15年10月18日（土曜）午後1時30分～午後6時

会場：東京医科大学病院教育棟2階203ゼミナール

出席者；宮島 祐、田中英高、林 北見、小枝達也、山下裕史朗、加我牧子、齊藤万比古
研究協力者；岩崎信明（宮本信也代理）、星加明德

#1：主任研究者；宮島 祐より本研究班設立の経緯説明

- 1) 平成10年からの厚生科学研究補助金；小児医薬の適正使用に関する研究班（大西班）において「小児科学会薬事委員会」が中心となって研究が進められ、小児科領域における薬剤のほとんどが適応外使用である実態を鑑み小児科学会を挙げて、その対策を講じることの重要性があるとの観点から小児科学会分科会代表委員が召集され「小児医薬調査研究班」が形成され現在に至る。
- 2) 日本小児心身医学会から星加明德東京医大小児科教授、日本小児精神神経学会から宮本信也筑波大学心身障害学系教授が各々の学会代表委員として大西班における「小児医薬調査研究班」として研究を開始した。
- 3) 平成10年度両医学会の合同調査は役員のみの小規模調査であったが、その時点ですでにADHDに対するMPHの適応拡大が最上位の課題として挙げられた。
- 4) 平成12年度両学会役員に対する再調査で off label use, orphan drug に対する理解の乏しさは如実であり、役員全体の約50%の理解のみであることも判明した。

平成13年度から日本小児心身医学会代表委員が田中英高大阪医科大学小児科助教授、日本小児精神神経学会代表委員が宮島祐東京医科大学小児科講師に各々交代し、さらに小児精神神経領域で共通の研究課題をもつ日本小児神経学会代表委員の大澤真木子東京女子医科大学小児科教授（林北見講師）が合同し、3 医学会共同研究体制となった。

- 5) 平成14年度大西班シンポジウム、医師主導型治験プロジェクトの方向性が示され、また平成14年度から厚生労働科学研究補助金「効果的医療技術の確立推進臨床研究事業」（小児疾患）の公募があり、「注意欠陥多動障害に対するメチルフェニデートの治療効果に関する研究」で応募したが、初年度は採択されなかった。
- 6) 平成15年度厚生労働科学研究補助金「効果的医療技術の確立推進臨床研究事業」

(小児疾患)に再度応募20課題中3課題に採択され、本研究班が活動を開始することとなった。

2 : 分担研究者の自己紹介と研究概要

- (1) 田中英高大阪医科大学小児科助教授 (日本小児心身医学会代表委員)
- (2) 林 北見東京女子医科大学小児科講師 (日本小児神経学会代表委員代)
- (3) 星加明德東京医科大学小児科教授
- (4) 岩崎信明筑波大学小児科講師 (宮本信也分担研究者代理)
- (5) 齊藤万比古国立精神神経センター精神保健研究所児童思春期保健部長
- (6) 小枝達也鳥取大学特殊障害学部教授
- (7) 加我牧子国立精神神経センター精神保健研究所知的障害部部長
- (8) 山下裕史朗久留米大学医学部小児科講師

3 : 研究計画

- 1) 初年度は①ADHD診断のガイドライン (案) 作成・・・12月までをめどに宮島が下書き
 - ②インターネット構築・・・特にセキュリティーシステムの徹底理解
 - ③サーバ立ち上げ・・・東京医科大学本部情報システム室
- 2) 次年度に何を計画するか次回班会議までに立案
 - ① シンポジウム、討論会・・・外国人招聘 (長寿科学財団資金)
反対論者、親の会などを交えた会合
 - ② 外国への研究者派遣・・・ (長寿科学財団資金)
 - ③ 臨床研究チーム設立・・・当初は小規模で、研究目標を熟知徹底したチームに限定＝セキュリティーの実証、一般家庭への浸透、学会のホームページとリンクなど
 - ④ 予算確保＝厚生労働科学研究補助金
 - ⑤ 2年目で臨床研究に突入するメリット、デメリット
特に客観性のある臨床研究のためには「委託研究」重要？
予算1000万円？

【第2回班会議議事録】

平成15年度厚生労働科学研究費補助金

効果的医療技術の確立推進臨床研究事業

小児科における注意欠陥／多動性障害に対する診断治療ガイドライン作成に関する研究

(H15-小児-003)

第2回班会議

期日；平成16年2月7日（土曜）午後13：00～17：00

会場；東京医科大学病院教育棟2階201ゼミナール

出席者；主任研究者 宮島 祐 (研究協力者；星加明德、沼部博直)
分担研究者 田中英高
林 北見 (研究協力者；石井かやの)
加我牧子 (研究協力者；稲垣真澄)
小枝達也
齊藤万比古 (研究協力者；渡部京太)
宮本信也 (研究協力者；岩崎信明)
山下裕史朗 (研究協力者；永光信一郎)

本研究班の課題

- I 小児科におけるADHD診断治療ガイドラインの作成
- II 客観性のある診断・評価方法およびツールキットの開発
- III ADHDに対するMPH治療効果についての二重盲検法を用いた多施設共同臨床研究
- IV 医師主導型多施設共同臨床研究においてインターネット活用とセキュリティー問題解決

- 1) 本研究班の目指す方向…………… (宮島)
MPHが適応外使用であるがゆえに、逆に小児科医の使用法・使用上の注意点に対する理解が不十分である懸念。診断自体に疑問がある症例に対する漫然とした投与も行われている現状。依存性・濫用の危険性に関して十分に理解しないまま投与されている可能性。など現状と問題点を把握した上で、適応拡大に対し慎重な取り組みをすることにより適正使用についての認識が深まることを期待する。
- 2) 現状調査
- #1：本邦における先行研究と本研究の位置づけ
 - (精神保健研究)……………齊藤先生
 - (文部科学研究)……………小枝先生
 - #2：諸外国の実情
 - (1) 諸外国のガイドライン作成の実情……………山下先生

アメリカ、EU、アジア（韓国）など

(2) 諸外国のガイドライン文献抄訳……………林先生

3) 診断

1 : 比較比喩テスト……………小枝先生

健常児を対象に比喩皮肉文テストCD-ROM版データ収集に向けて準備中。

1月中にはかなり密度の濃い健常児データを収集予定。

比喩皮肉文テストCD-ROM版はすでに完成している。限定10枚の作成。

患児群（ADHD v.s. 高機能PDD）を1年間で各20名以上集められそうな研究者に限定して振り分ける予定。

分担研究者も含めて、データ収集に参加できそうな方を4・5名ノミネート予定

2 : Toolkits、ブラウンのスケール……………山下先生

ブラウンのスケールの一部訳を紹介

ブラウンのスケールの標準化についてどういうステップをふめば良いのか検討。

3 : てんかんとADHD様症状研究……………林先生

4 : ADHDとチック（MPH治療に伴う弊害、副作用症状）……………星加先生

4) 治療

1 : 久留米市の治療の取り組み（アメリカとの対比を含む）……………山下先生

2 : 臨床研究における薬物（MPH）の使用方法……………（宮島）

臨床研究実施に当たってのプロトコル案

5) 評価、予後調査

1 : 生理学的評価（実際の医療で行うべきシステム作り）……………加我先生

2 : ホームページ臨床研究の項目チェックリスト……………田中先生

斉藤班のガイドラインから、ピックアップして、50～100項目に絞る。

ADHD Toolkitも加え、和訳+項目を増やす。

3 : 長期予後調査、長期予後に影響する要因の検討……………宮本先生

対象：分担研究者及びその協力者の機関に受診したADHD患児で、現在、16歳以上になっている子どもを対象。

調査項目：現在の心身の状態と社会生活の安定度を調査する。

目的：ADHD児の思春期以降の状態の実態を明らかにする。

さらに、カルテから、その子の受診時の状況や治療状況を拾い出し、現在の状態との関連をみる。

- 6) 研究班ホームページならびにデータベース、掲示板の構築・・・沼部先生
- 7) そのほか

1 : 研究協力者のリストアップ

企画書提出時リストアップ

旭川厚生病院；沖 潤一先生、甲南女子大学；稲垣由子先生、

長野こども病院；平林伸一先生、国立成育医療センター；宮尾益知先生

研究協力者候補；（小枝先生）

大阪医大；鈴木先生、淀川キリスト病院；鍋谷先生（長野こども病院；平林伸一先生）

他

2 : 平成16年、17年のスケジュール

- (1) 平成16年10月1～3日；日本小児心身医学会（田中英高会長）
研究班の設立の経緯説明を含めたランチョンセミナー
- (2) 平成16年11月19～20日；日本小児精神神経学会（山下裕史朗会長）
USAガイドライン作成に関わったPelham博士の招聘講演
（+シンポジウム、啓発運動）
- (3) 小規模ながら分担研究者中心の二重盲検を取り入れた多施設共同研究に着手。
ガイドラインの適正さの評価をあわせ行う。
ノバルティファーマ社との交渉（プラセボなど、費用、薬事法）
- (4) 平成17年6月；日本小児神経学会（熊本）で成果発表
小児神経学会薬事委員会企画イブニングセミナー（大澤真木子委員長承諾）
- (5) 規模を拡大した臨床試験を平成17年研究で行い、成果を平成18年の小児科学会で発表する。・・・（日本初の小児における向精神薬の二重盲検臨床試験）
*医師会主導の大規模治験への登録（済み）
- (6) ITでUSAやオランダなど先行するガイドライン作成国との相互情報交換
- (7) 患者さんと医療機関の相互情報交換、臨床試験の情報公開
*（3）（5）（6）に関しては今年度からセキュリティーを含めた問題抽出検討を重ね、本番に備える。・・・（情報公開の諸問題）
- (8) MPHの小児適応拡大に反対意見を交えた公開討論会を上記日程に組み込み、合意を得る。「患者さんの立場に立った」かつ「乱用・誤用を防ぐ」小児適応申請を可能とする上で不可欠と位置づける。
MPHが第一種向精神薬であることは、すなわち麻薬処方に順ずる規制を医師自らが認識することが求められている。

V. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

本研究班が関連する研究班報告・学会活動・啓発運動

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
宮島祐、田中英高、 林北見、大澤真木子	M P H の適正使用及び 「小児科における注意欠 陥/多動性障害の診断・治 療ガイドライン」作成に 向けての研究	医薬安全総 合研究事業 (H13- 医薬 -027)平成13 年度研究報 告書		164-167	2002
小枝達也、平林伸一、 宮本信也、榊原洋一	第43回日本小児神経学会 イブニングトーク ADHDを取り巻く医療の あり方について	脳と発達	34(2)	158-161	2002
加我牧子、宮本信也 (宮島祐、小枝達 也、山下裕史朗、上林 靖子)	第44回日本小児神経学会 イブニングトーク 注意欠陥/多動性障害と methylphenidate	脳と発達	35(2)	143-146	2003
宮島祐、古荘純一 (神山潤、齊藤万比古)	第45回日本小児神経学会 イブニングトーク 行動異常と選択的セロト ニン再取り込み阻害剤	脳と発達	36(2)	147-150	2004
山下裕史朗、宮島祐	第30回日本小児臨床薬理 学会シンポジウム 3) AD/HDの薬物療法 4) チックの薬物療法	第30回日本 小児臨床薬 理学会プロ グラム・抄録 集		39-40	2003
山下裕史朗	第13回日本臨床精神神経 薬理学会ワークショップ 3) ADHDの薬物療法	第13回日本 臨床精神神 経薬理学会 プログラム ・抄録集		50	2003
山下裕史朗 他	軽度発達障害の児童に対 する支援－医師、スクー ルカウンセラー、学校の 連携	日本LD学 会第12回大 会論文集		149-154	2003

山下裕史朗 他	久留米市とその周辺地域における軽度発達障害児の支援システム 久留米市の通常学級に在籍する小学生のADHD症状の調査	日本LD学会第12回大会論文集		293-294 295-296	2003
齊藤万比古	注意欠陥／多動性障害（ADHD）の診断・治療ガイドライン	第404回広島精神神経学会			2003
細金奈奈, 齊藤万比古, 佐藤至子, 入砂文月, 秋山三左子, 渡部京太, 今井淳子, 小平雅基, 宇佐美政英, 笠原麻里, 飯田順三, 原田謙, 上林靖子	注意欠陥・多動性障害の子どもの予後に影響を及ぼす要因について	第44回日本児童青年精神医学会総会			2003

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社	出版地	出版年	ページ
宮島 祐	慢性疾患・悪性疾患児の心理社会的問題と包括的ケア	星加明徳 宮本信也	よくわかる子どもの心身症	永井書店	東京	2003	252-260
宮本信也	心身相関のメカニズム	星加明徳 宮本信也	よくわかる子どもの心身症	永井書店	東京	2003	3-14
田中英高	心身症および関連領域 起立性調節障害	星加明徳 宮本信也	よくわかる子どもの心身症	永井書店	東京	2003	104-114
飯山道郎 齊藤万比古	心因性視覚障害 心因性聴覚障害	星加明徳 宮本信也	よくわかる子どもの心身症	永井書店	東京	2003	226-234

小枝達也	発達障害および 関連障害	星加明德 宮本信也	よくわか る子どもの 心身症	永井書店	東京	2003	263-280
上林靖子, 齊藤万比 古, 北道子 編(共著)	注意欠陥・多動性 障害 - AD/HD - の 診断・治療ガイド ライン	上林靖子, 齊藤万比 古, 北道子	注意欠陥・ 多動性障害 - AD/HD - の診断・治 療ガイドラ イン	じほう	東京	2003	
齊藤万比古	子どものいじめ と自殺	中田洋二郎 編	イジメブッ クス イジ メの総合研 究2 イジ メと家族関 係	信山社	東京	2003	116-147

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
宮島祐、星加明德	睡眠時異常行動の心療のポイント	小児内科	35 (増刊号)	302-305	2003
星加明德、宮島祐 他	睡眠驚愕障害	小児内科	35 (増刊号)	845-851	2003
星加明德、中島周 子、中嶋光博、飯 山道郎、山中奈緒 子、宮島祐	注意欠陥/多動性障害	心療内科	7	209-213	2003
K. Kaga, M. Kaga, F. Tamai, M. Shind o	Auditory Agnosia in Children after Herpes Encephalitis	Acta Otolaryngol	123	232-235	2003

T. Hatori, M. Inagaki, S. Shirane, M. Kaga	Developmental Changes of Auditory P300; Difference Between Two Stimuli Conditions, Non-verbal Sound and Verbal Sound	精神保健研究	49	159-167	2003
佐々木匡子、稲垣真澄、加我牧子	言語性意味理解障害児にみられた事象関連電位N400の異常について	脳と発達	35(2)	167-170	2003
稲垣真澄、白根聖子、加我牧子	AD/HD児の高次脳機能評価：視覚性弁別課題による検討	臨床脳波	45(12)	767-772	2003
関あゆみ、小枝達也	抗うつ薬、中枢神経刺激薬	小児科臨床	57(4)	823-830	2004
山下裕史朗	久留米保健福祉環境事務所の「就学前の気になるお子様の相談」の現状	チャイルドヘルス	7(2)	67-70	2004
田中英高 他	小児心身医学にEBMは必要かー量的研究と質的研究の融合ー	日本心療内科学会誌	7(3)	133-139	2003
宮田智基、日高なぎさ、岡田弘司、田中英高、寺嶋繁典	小児のストレス・マネジメントにおける基礎研究(第1報) 小児におけるストレス反応とストレス軽減要因との関係	心身医学	43(2)	129-135	2003
寺嶋繁典、日高なぎさ、宮田智基、岡田弘司、田中英高	小児のストレス・マネジメントにおける基礎研究(第2報) ソーシャルスキルのストレス軽減効果	心身医学	43(3)	185-192	2003
寺嶋繁典、宮田智基、日高なぎさ、田中英高	中学校におけるストレス・マネジメント教育の指導案開発に関する実践的研究(2)	関西大学社会学部紀要	34(3)	109-128	2003
齊藤万比古	精神疾患と心身症	からだの科学	231	75-79	2003